

第3章 米子城の概要

第1節 米子城の歴史

米子城は、応仁～文明年間(1467～1487)に山名宗之により国境警備の砦として飯山に築かれたことに始まるといわれている。

この飯山については諸説あるが、近世城郭としての米子城は、戦国時代末期の天正 19 年(1591)頃に東出雲・隠岐・西伯耆の領主として月山富田城に入った吉川広家により、湊山に築城が開始されたといわれている。中世末期までの米子湊は、現在より深浦寄りの丸山(内膳丸)麓に近いところであったと推測され、湊山城築城をはじめた吉川広家の時代に、石垣を築く等の港湾整備が行われたものと思われる。

広家の領内統治の時代は文禄・慶長の役等の戦陣、出兵に明け暮れており、7割方完成といわれた米子城がどこまで築城されていたのかについては明らかではない。わずかに残る文書に、皆生村を開拓した八幡新

兵衛への安堵状、日御碕神社への犬田村(陰田村)保証文、日吉津村伊勢宮への神田・祭礼用米の保証文等があり、広家時代の行政の一端がうかがわれるだけである。しかしながら、海陸の要地として雲伯両国の中心に位置し、港町でもあった米子の湊山を選び、城下町の区割りや城の縄張りを定め、城を築いた広家の功績は大きい。

慶長 5 年(1600)の関ヶ原の戦後、吉川広家は周防国岩国に転封となる。代わって、慶長 6 年(1601)に 18 万石の領主として駿河国から入った中村一忠は一旦、尾高城に入り、慶長 7 年(1602)頃米子城を完成させ、入城したと言われている。当時、中村一忠は 11 歳と幼少であったため、家老の横田内膳村詮が城下町を整備し、藩政を治め、これにより、米子城の惣構そうがまがほぼ完成したと考えられている。慶長 8 年(1603)11 月 14 日、米子城内において中村一忠によって家老横田内膳村詮が殺害される「米子城騒動」が起きた。この米子城騒動については諸説あるが、一忠は騒動から 6 年後の慶長 14 年(1609)に急死し、跡継ぎがなかったため所領は没収され、中村家は断絶となった。

中村家断絶後、慶長 15 年(1610)に会見・汗入の領主として加藤貞泰(6 万石)が美濃国黒野から入城する。貞泰は米子に移ると、御船奉行に市橋新右衛門重長を就任させ、元和 2 年(1616)には御座船として駒手丸を竣工させている。また、慶長 16 年(1611)10 月 18 日、陰田の山王社に社領 3 石を寄進、勝田神社の造営、祇園社の再建造営、元和 2 年(1616)3 月 12 日、栗嶋神社を再建造営、伊予国大洲に転封直前の元和 3 年(1617)4 月には大山寺の地藏権現社の神輿の修造等を行っている。

元和 3 年(1617)加藤氏が伊予国大洲に転封になった後、藩主池田光政の一族の池田由之、由成が米子城預かり(3 万 2 千石)となり、寛永 9 年(1632)まで米子城を預かった。寛永 9 年(1632)に池田光仲が岡山から鳥取の藩主となると、家老の荒尾成利が米子城預かりとなり、以後、明治 2 年(1869)に藩庁へ引き渡されるまで、代々荒尾氏が城を預かり管理した。



月山富田城跡



北東上空から見る米子城跡

米子城関連年表

年号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
応仁元年	1467	この頃、山名教之の配下 山名宗之（宗幸）が米子飯山砦を築いたという。	応仁・文明の乱が勃発（～1477）
文明2年	1470	山名軍（羽衣石、小鴨、南条）尼子清貞軍に境松で破れ米子城に逃げ込む（出雲私記）。	
文明3年	1471	山名之定 米子城を守る。	
永正10年	1513	出雲の尼子経久、この頃から米子城等をしばしば攻める。	
大永4年	1524	尼子経久伯耆に侵入 米子城、淀江、尾高、天満、不動嶽の城を攻め落とす（大永の五月崩れ）。	
永禄5～9年	1562 ～ 1566	尼子毛利の抗争 尼子氏没落。米子城は毛利氏により制圧される。	
永禄11年	1568		織田信長の入京
元亀2年	1571	山中幸盛らによる尼子氏再興運動 羽倉孫兵衛 500 人で米子町を焼き討ちにする。城番 福頼元秀は防ぎきれず、城に逃げ込む。	
天正元年	1573		織田信長が室町幕府を滅ぼす。
天正3年	1575	京都より薩摩に戻る途中の島津家久一行、米子を通過する。「よなこといへる町」との記述からも、少なくともこの頃には町が形成されていたと思われる（『中書家久公御上京日記』）。	吉川元春、尼子方伯耆由良城を攻略する。
天正4年	1576		織田信長が安土城築城を開始する。
天正6年	1578	尼子勝久上月城で自刃 尼子氏滅ぶ。この頃の米子城番は古曳吉種。	
天正8～10年	1580 ～ 1582		織田対毛利の合戦 羽柴秀吉による鳥取城攻め 本能寺の変で信長が死去する。
天正13年	1585	八橋以西の伯耆三郡が毛利氏の領地となる。	羽柴秀吉と毛利輝元の和睦
天正18年	1590		豊臣秀吉が天下統一する。
天正19年	1591	吉川広家が秀吉から西伯耆、出雲、備後等 12 万石を認知され富田城に入るが、居城を米子に変えるため、山県九左衛門を奉行として築城開始。お立山を「湊山」と改名する。 吉川広家伯耆西三郡の法勝寺、四日市（戸上山城）、尾高、日野（黒坂）の城下町の住民を米子に勧誘する。	
文禄元年～慶長3年	1592 ～ 1598	吉川広家が古曳吉種とともに朝鮮に従軍。古曳吉種は朝鮮で討ち死にする。	文禄・慶長の役（朝鮮出兵）
慶長3年	1598	吉川広家 富田城に帰り、湊山築城を監督。米子湊・深浦湊整備も始まる。	豊臣秀吉死去。朝鮮半島の日本軍撤退
慶長5年	1600	吉川広家西軍として出陣 築城奉行は祖式九右衛門（長吉）米子城完成のため住民 6 割を動員する。吉川広家、周防国岩国（3 万石）に転封、この頃城は 7 割方完成。 駿河国府中城主、中村一忠（18 万石）が伯耆国領主となり尾高城に入る。 家老横田内膳村詮の経済政策 倉吉、岩倉（関金）の住民を米子に勧誘し、米子城下の都市計画を立案する。	関ヶ原の戦い
慶長7年	1602	中村一忠、尾高城から完成した米子城に移る。	
慶長8年	1603	中村一忠、家老の横田内膳村詮を暗殺する（米子城騒動）。	徳川家康が江戸幕府を開く。

第3章 米子城の概要

年号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
慶長9年	1604	米子城騒動により幕府の命によって依藤半左衛門、河毛備後を米子城の執政とし、君側の安井清一郎、天野宗把、道長長右衛門を死罪にする。	
慶長14年	1609	中村一忠20歳にて死、中村家は断絶する。	
慶長15年	1610	岐阜美濃国黒野城主加藤貞泰、伯耆国会見・汗入郡6万石領主となり入国する。	
慶長17年	1612		幕府、キリシタンを禁じる。
慶長19年	1614	加藤貞泰、大坂冬の陣で戦功を挙げる。 この頃、加藤貞泰、日下瑞仙寺、大寺村安国寺を米子城下の寺町に移し、米子城下の氏神勝田大明神を現在地に移す。 亡父加藤光泰のために菩提寺曹溪院を亀島に建立、五輪塔を立てる。	大坂冬の陣
元和元年	1615	幕府が一国一城令を発したが、米子城保存と決まる。	大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡。江戸幕府、一国一城令を制定
元和2年	1616	中江藤樹、祖父中江吉長とともに米子に来住する。 加藤貞泰、駒手丸を建造する。	徳川家康死去
元和3年	1617	加藤貞泰、伊予国大洲に転封。 因伯領主となった池田光政の一族、池田由之が米子城預かり(3万2千石)となる。 米子町人大谷甚吉・村川市兵衛、竹島(韓国名鬱陵島)に漂着、その後幕府より竹島渡航を許可され、あわび、アシカ等の魚猟、木竹の伐採を行う(竹島一件)。	池田光政が因幡・伯耆32万石の領主となる。
元和4年	1618	池田由之死亡、子由成が米子城主となる。 由成、亡父由之の供養のため、海禅寺を亀島に建てる。	
寛永9年	1632	池田光仲、因伯支配(32万石)、鳥取藩主席家老荒尾成利が米子城預かりとなる。米子城下には成利の弟成政が2000石で遣わされる。	
承応元年	1652	荒尾成利が隠居し、2代目成直 米子城預りとなる。	
寛文5年	1665	堀が埋まる害があるため、米子城の内堀に柴積み船の入ることを禁止する。	
寛文7年	1667	米子城西北部外郭修理。	
寛文12年	1672	荒尾成直が米子城に入る。	鎖国令、参勤交代制の確立
延宝元年	1673	米子城下侍屋敷の空家について、荒尾氏が米子町奉行に命じて適当に処分することを許可し、区画を整理する。	寛永通宝初鋳
延宝7年	1679	荒尾成直 没する。 3代目荒尾成重、米子城預りとなる。	
貞享2年	1685		池田綱清、鳥取藩2代藩主となる。
貞享4年	1687		「生類憐みの令」発布
元禄5年	1692	4代目荒尾成倫、米子城預りとなる。	
元禄6年	1693	落雷等による天守閣への危険を考慮し、米子城本丸天守近くの蔵に収蔵の火薬類を、内膳丸の角櫓に移す。	
元禄10年	1697	大風で米子城本丸四重櫓が1尺5寸ほど傾く。	
享保5年	1720	米子城米蔵の約半数を大修理。 壁・屋根部分に川石を主体として約2万個使用。 4代目後藤市右衛門が新田を開発する(後の後藤村)。	
享保19年	1734	5代目荒尾成昭、米子城預りとなる。	
延保4年	1747	6代目荒尾成昌、米子城預りとなる。	

年号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
寛延元年	1748	7代目荒尾成熙、米子城預りとなる。	
宝暦13年	1763	米子城修覆米積立法を制定。 以後、富豪の負担で1800石を積み立て、利米540石のうち、半額を城郭修覆にあてる。	
安永7年	1778	川口番所・陰田番所、藩の直営となる。	ロシア船蝦夷地に来航、松前藩に通商を求める。
天明7年	1787	8代目荒尾成尚、米子城預りとなる	松平定信老中となり、儉約令を出す。 寛政の改革始まる。
寛政元年	1789	幕府巡見使 石尾七兵衛ら3人、米子を訪れ、荒尾成尚、米子城二の丸で饗応にあたる。	
寛政4年	1792		ロシア使節ラスクマン根室に来航
寛政8年	1796	城下外郭筋堀の埋没を浚渫。 以後、しばしば町人富豪に請け負わせる。	
寛政12年	1800		伊能忠敬蝦夷地を測量する。
文化3年	1806	伊能忠敬 米子町測量第1回。 米子城郭内測量を米子役人が拒否する。	
文政元年	1818	9代目荒尾成緒、米子城預りとなる。 8月に米子入りし、約1ヶ月滞在。	
文政8年	1825		外国船打払令
天保12年	1841		天保の改革始まる。
天保13年	1842	藩内海岸の各番所に大砲が備え付けられる。このうち、境番所と米子川口番所は荒尾氏の負担とする（『鳥取県郷土誌』）。	
天保14年	1843	異国船警衛のため、荒尾成裕、父成緒に代わり米子城入りする。	
嘉永4年	1851	10代目荒尾成裕、米子城預りとなる。	
嘉永5年	1852	四重櫓と石垣を鹿島家の負担により大修理する。	
嘉永6年	1853		アメリカ使節ペリー浦賀来航
安政5年	1858		日米修好通商条約調印
文久3年	1863	荒尾成裕・成富父子海岸防備のため米子に入る。	幕府、自国海岸防備の厳を達する。 境台場に大砲8門配備 淀江台場築造、台場砲3門配備
慶応3年	1867	11代目荒尾成富、米子城預りとなる。	大政奉還
慶応4年	1868	2月、山陰道鎮撫総督 西園寺公望と一行数百名、米子城下に入る。	明治維新
明治2年	1869	2月、荒尾氏 自分手政治廃止の発令。 5月、朝廷より米子城返上の命令あり。城内の武器は鳥取に引き渡される。 8月、米子城を藩庁に引き渡す。 10月、荒尾成富、家督を成文に譲る。 三の丸西裏御門（現鳥取大学医学部附属病院地）のところに坂口氏の醸造工場が設立される。	池田慶徳、鳥取藩知事となる。

第3章 米子城の概要

年号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
明治3年	1870	救民のため、在町の富豪の寄付により人夫徴発、米子城外堀浚渫の請負を行わせる。	藩知事伯耆西3郡巡視、米子町の鹿島家に宿泊する。
明治4年	1871		廃藩置県。鳥取県誕生。因幡国、伯耆国は鳥取県となる。
明治5年	1872	1月 区制を敷き、町を3区にわけて戸長を置く。 第82区（東町・堀端町・郭内・西町・宮町・中町・五十人町・内町・天神町） 第83区（博労町・糶町・道笑町・日野町・茶町・塩町・大工町・新博労町） 第84区（法勝寺町・紺屋町・四日市町・東倉吉町・西倉吉町・尾高町・岩倉町・立町・灘町・灘町新田・寺町・新法勝寺町） 米子城山は土族小倉直人らに払い下げとなる。 西町に鳥取県米子支庁を置く。	
明治6年	1873	米子城の管理を大蔵省に移す。 城山は払い下げられ、城内の建物類が売却され、数年後、取り壊される。	廃城令。廃刀令 12月 大区小区制施行により、米子は第13大区に入り、第82区は小4区、第83区は小3区、第84区は小5区となる。
明治9年	1876		鳥取県は島根県に合併
明治11年	1878		郡区町村編制法により、島根県会見郡米子町・汗入郡淀江町として町制施行
明治12年	1879	この頃天守の取り壊しが始まる。	
明治13年	1880	松江監獄米子分監が米子城三の丸（現湊山球場地）の米蔵を利用して置かれ、広い面積を占めていた。	監獄の制度を定め、松江監獄署内に監獄本署を置き、松江・鳥取・浜田・米子・杵築・隠岐（西郷）に支所を置く。
明治14年	1881		島根県から因幡国8郡・伯耆国6郡の2州を分割し、鳥取県が再置される。
明治19年	1886	深浦（御船手）郭に城南病院が建設される。	
明治22年	1889		町村制施行により、会見郡米子町・汗入郡淀江町が発足
明治25年	1892	この頃、湊山と飯山の北側は荒尾政成の所有地、飯山南側と湊山本丸は小倉直人が所有、湊山西面は児島喜平が所有。 これを米子町に売却し、売却金半額を町に寄付する話、進展せず。 その後、数年で全山ほとんど坂口平兵衛の所有となる。 この頃、三の丸には原牧場が造られる（昭和15年閉場）。	
明治26年	1893	現鳥取大学医学部附属病院地に鳥取県立病院米子支部病院が創設される。	洪水、米子町の過半浸水する。
明治29年	1896	大手門入口の飯山下に西伯郡役所が開設される。	郡の統廃合により、会見郡・汗入郡から西伯郡に変更
明治32年	1899	三の丸鈴門側のところに日本冷蔵商會が設立される。 鳥取県立病院米子支部病院を西伯郡立病院とする。	
明治35年	1902	城山下の乳業家原弘業が地主坂口平兵衛に相談し、城山本丸を整備して弘楽園とし、茶亭富士見亭を建て、うば団子を名物とする。	山陰地方最初の鉄道が境～御来屋間に開通する。
明治38年	1905	三の丸、郡役所の東に合資会社米子製鋼所が設立される。	
明治39年	1906	柘形および二の丸表中御門付近に米城焼が開かれる。 錦公園が竣工、鳳翔閣・西伯郡公会堂が建設される。 清洞寺跡の五輪塔、了春寺に移設される。	

年号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
明治40年	1907	皇太子御召艦鹿島にて境に上陸、鳳翔閣に2泊。	皇太子、山陰地方に行啓
明治41年	1908	錦公園に日露戦争記念碑を建立する。 米子港修築開始。	山陰線、米子―鳥取間、米子―松江間が開通する。
明治44年	1911	深浦港の浚渫が完了する。	
明治45年	1912		米子で「山陰鉄道開通記念全国特産品博覧会」が開催される。
大正12年	1923	上後藤に移転した三の丸の米子分監跡地に後藤グラウンドが開場する。 郡制廃止に伴い、錦公園・鳳翔閣・公会堂・物産陳列場を米子町に譲渡する。	郡制廃止 関東大震災
大正13年	1924	湊山を禁漁区にする。	
大正15年	1926	6月13日、郡役所が廃止される。	
昭和2年	1927	了春寺の五輪塔、清洞寺跡に戻される。	西伯郡米子町が鳥取県下で2番目に市制を施行。米子市となる。
昭和3年	1928	錦公園内に噴水池築造、通水式を行う。	
昭和8年	1933	坂口家が湊山約34,000坪を米子市に寄付する。 深浦港改良工事完了。	
昭和9年	1934	湊山公園整備計画策定。	
昭和10年	1935	登山路の改修、天守にベンチ施設。ソメイヨシノの植栽。	米子市の町区変更、新町設定。47町を66町とする。
昭和11年	1936	深浦に石黒造船所米子工場が創業、昭和16年米子造船所となる。	
昭和15年	1940	米子市湊山公園風致地区が設定される	山陰歴史館が2600年記念事業として米子商品陳列場に開館する。
昭和19年	1944	米子城二の丸跡地英霊塔敷地工事が完成する。	
昭和20年	1945	3月、米子医学専門学校附属病院（現・鳥取大学医学部附属病院）が設立される。	建物強制疎開。 7月24日 - 7月28日 米子空襲。特に28日の空襲では最大の被害が出た。
昭和22年	1947		昭和天皇行幸、坂口家泊
昭和25年	1950	鳥取県産業観光博覧会が三の丸（現湊山球場地）・二の丸で開催される。	
昭和26年	1951	湊山公園計画の一部として出山を整備、山麓に海水浴場が開設される。	
昭和28年	1953	小原家から寄付を受け、長屋門が二の丸に移設され、米子市立山陰歴史館として開館。 産業観光博覧会時の美術館跡地（現西部医師会館地）が県立米子図書館となる（～昭和54年）。 湊山球場第1期工事完成、6月1日球場開きを行う。	
昭和32年	1957	米子城跡、都市公園として湊山公園の一画となる。	
昭和34年	1959	深浦大橋が完成する。	

第3章 米子城の概要

年 号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
昭和 35 年	1960	国道 9 号が湊山と飯山の間を貫通する。	
昭和 39 年	1964	湊山球場に隣接して米子児童図書館が建設される。	
昭和 41 年	1966	飯山に英霊塔が建設される。	法勝寺電車廃線となる。 皇太子、同妃が来米、第 8 回国立公園大会に臨席される。
昭和 42 年	1967	深浦(御船手)郭に Y S P (体育施設) が建設される。	
昭和 45 年	1970	錦公園の鳳翔閣を解体する。 中江藤樹顕彰碑が就将小学校跡に建立される。	
昭和 46 年	1971	清洞寺岩沖から出山を結ぶ埋立地が造成される。	
昭和 48 年	1973	廃線後の法勝寺電車客車が米子児童図書館横に置かれ、読書室として活用される(～昭和 61 年)。	
昭和 52 年	1977	「米子城跡」、「旧小原家長屋門」、「清洞寺跡」が米子市指定文化財に指定される。	
昭和 53 年	1978	「中村一忠墓地附中村一忠主従木像」が米子市指定文化財に指定される。 米子城跡に電飾城が初目見える。	
昭和 57～59 年	1982～1984	石垣修理工事を実施する。	
昭和 61 年	1986	三の丸の法勝寺電車客車を湊山公園内に移転する。 城山大師補強修理工事世話人会が結成され、弘法大師の補修が完成する。	
昭和 62 年	1987	鳥取大学医学部附属病院の拡充計画のため、三の丸の稲田氏醸造工場は夜見町に移転する。	
昭和 63～平成元年	1988～1989	病院建設に伴い、久米第 1 遺跡の発掘調査を実施する。	
平成 3～4 年	1991～1992	病棟改築工事に伴い、米子城跡No.1 遺跡の発掘調査を実施し、船入石垣の遺構を検出する(～4 年)。 湊山公園の法勝寺電車客車をパティオ広場に移設する。	
平成 12 年	2000		鳥取県西部地震発生。米子市博労町では震度 5 強を観測する。
平成 13 年	2001	震災に伴う石垣修理事業を行う。	
平成 17 年	2005	国史跡指定に係る意見具申(7 月 27 日)	米子市・西伯郡淀江町が新設合併。旧米子市を廃して新・米子市となる。
平成 18 年	2006	本丸跡、内膳丸跡、二の丸跡が「米子城跡」として国の史跡に指定される。(1 月 26 日)	
平成 20 年	2008	史跡米子城跡整備基本構想案を策定する。(8 月)	
平成 27 年	2015	米子城跡の遺構分布調査、測量調査を行う。 八幡台と推定される地区と水手郭下方で発掘調査を実施する。	
平成 28 年	2016	登り石垣の発掘調査を実施する。	
平成 29 年	2017	史跡米子城跡保存活用計画を策定する。 堅堀の発掘調査を実施する。	
平成 31 年	2019	史跡米子城跡整備基本計画を策定する。 登城路等の発掘調査を実施する。	

第2節 米子城の構造

米子城は、中海に張り出した標高 90.1mの湊山頂上の天守を中心に、北に内膳丸（丸山）、東に飯山を出丸とし、中海から水を引き込んだ二重の堀と中海で取り囲まれた地域に城郭を配置する、海城と山城の両側面を併せ持つ城郭構造である。その最大の特徴は、本丸、内膳丸、飯山（采女丸）といった山上部の城郭部分と、二の丸、三の丸等の山麓の居館部分で構成されていることである。現在、建物はすべて失われているが、郭や石垣は往時の状況をとどめており、その様子は藩政時代に描かれた多くの米子城絵図や遺構によって知ることができる。

（1）本丸

湊山山頂部に高石垣を巡らせて、築かれている。本丸は、大きく2段構造で上段の天守と四重櫓からなる天守郭は、東側に2段、北側に1段控え積み郭を持ち、二か所に虎口をもつ。本丸御門である鉄門は二重の外枅形を構え、南西側には冠木門を持つ平虎口が配されている。下段は水手郭、遠見郭、番所郭から構成されている。南西側の水手郭は多聞櫓、続二重櫓3棟、水手門を配し、門外にも2つの外郭を持つ。遠見郭は、天守郭の北下段にあり遠見櫓、二重櫓を配していた。遠見櫓北東隅部の裾から内膳丸に向かって登り石垣が築かれている。番所郭は天守郭の東下段にあり番所を配する。



本丸縄張図『伯耆米子城』（立花書院）より



米子御城明細図（本丸を拡大）

（2）内膳丸

湊山北側の丸山に築かれた郭で、尾根頂部を長方形に2段に配置された郭から構成されている。中村一忠の家老横田内膳村詮が監督してつくったという伝承があるため、「内膳丸」と呼ばれる。また、「二の御丸」と記された絵図（米子御城明細図）もあり、本丸に次ぐ「二の丸」として築かれた郭と考えられる。この郭から本丸へ向けて、登り石垣を設け、西の防衛線が築かれていた。内膳丸と登り石垣との接点には江戸時代以降冠木御門が配され、中海側からの登城口が設けられている。上段の郭には隅櫓2棟が配されており、幕末の絵図には「煙硝蔵」と記されている。近年の調査の結果、内膳丸石垣には改変された箇所が多く確認されたが、絵図資料にはその変遷は描かれていない。

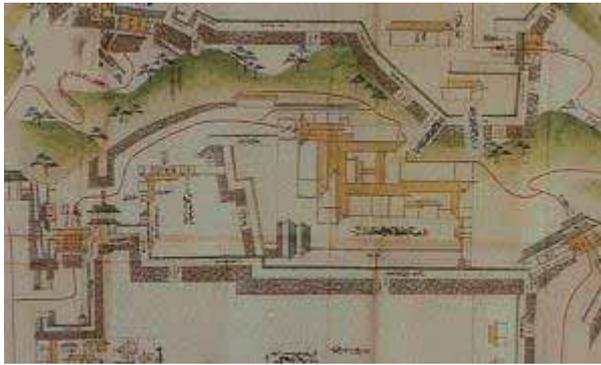
(3) 二の丸

湊山北裾の谷部に山麓居館として築かれた郭である。長さ 220m 以上の高石垣で囲った 2 段の郭と枳形入口、虎口で構成される。上段の郭には御殿と蔵、侍部屋等の付属建物が置かれた。裏門側には櫓門と続多聞櫓を置く。東側の表中御門には冠木門と二重櫓を構え、その外側に付設するように枳形が配されていることから、この枳形は築城後のある時期の増築と考えられる。

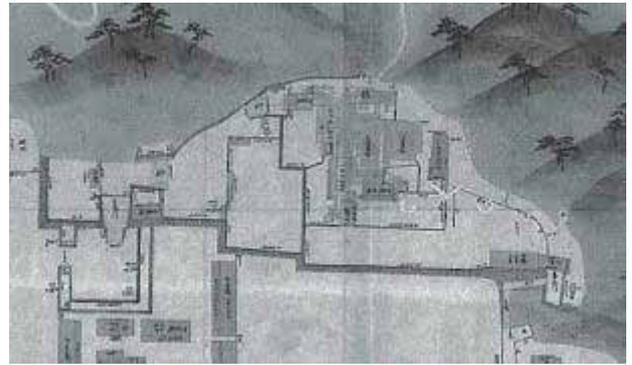
裏側の裏中御門は太鼓御門と呼ばれ、2 階に大太鼓が置かれ、時刻や非常召集を告げたという。幕末の文久年間、松江藩の蒸気船八雲丸が三柳沖に現れた時に、この太鼓が鳴り渡り、米子組士達は枳形へ駆けつけたといわれている。



伯州米子之図 (内膳丸を拡大)



伯州米子之図 (二の丸を拡大)



米子御城絵図 (二の丸を拡大)

(4) 三の丸

山麓部の外郭として二の丸北側の一段下に構えられた郭である。二の丸北側から飯山（采女丸）、湊山、丸山の北側を内堀で囲った郭で、城域を完全に囲い込んでいる。東側の表御門、西側の裏御門、及び中海に面した鈴門を配する。表御門、裏御門ともに枳形が配されており、多聞櫓が築かれていた。

表御門を入った中央部（現湊山球場）には、絵図によれば、城を預かっていた荒尾氏の私邸と考えられる屋敷の記載があり、築城初期にも城主の下屋敷等の御殿が構えられていたと考えられる。このほか番士詰所、作事方詰所、作事小屋、米蔵、蔵屋敷等の施設が置かれていた。

飯山（采女丸）の麓に材木蔵、大工小屋、馬屋等があり、深浦側への狭隘部には埋門と天守への登城路があった。鈴門入口脇には番人小屋があり、その南側には鈴茶屋があり、家老荒尾氏はここで茶会を催している（「鹿島家文書」）。鈴門南側はすぐに中海となり、船着場の石段があった。荒尾氏は粟島参詣等の帰りにここに御座船をつけたと記されている。また、内堀には、表御門と裏御門の 2 か所に橋がかけられていた。この内堀は中海とつながっており、開口部には船溜り施設が設けられていた。



米子御城明細図（三の丸を拡大）

（5）深浦（御船手）郭

湊山の南山裾の中海深浦に面して御船手郭が設けられていた。ここには深浦御門が築かれ中央部は2段の石垣で囲われ、その上段には二重櫓が配されている。下段の石段下には船着場があり、深浦から出山に至る海岸部には、船小屋、番人小屋等の施設が設けられていた。さらに深浦から飯山（采女丸）の麓にかけては御船頭屋敷が2軒建てられ、小祠も3か所祀られている。藩の御船手の役所と船頭詰所があり、主として西伯耆一帯の海事の監督にあたった。郭南東には深浦御門が設けられその外側には船着き場の雁木が設けられていた。

深浦は飯山に砦ができた頃からの海への出入り口であったようで、湊山、飯山の南側の湾入りが深い良港であったことから、米子湊に先行する港として吉川氏時代には朝鮮渡海に重要な役割を果たしたと考えられる。城主加藤貞泰は造船事業に力を注ぎ、元和2年(1616)には御召船「駒手丸」が進水、米子から大洲への国替えには大船団で移動している。

江戸時代、深浦には番所が置かれる。この番所は、米子城の海からの防衛陣地であったばかりでなく、深浦番所の役人は、米子近くの日本文や中海で船の遭難があったときには現場に出向いての調査や、外国船への警戒にあたる等軍港的な責任を負っており、加茂川口の川口番所等と仕事を分担していた。

また、深浦湊は幕末の四重櫓改修の折に石垣の石材を運び上げるのにも使用されている。鹿島家文書の四重櫓改修日記によれば、ここから荷揚げした石材を八幡台まで運び上げたという。



米子御城明細図（深浦郭を拡大・上下反転）

(6) 出山

湊山西側の中海に張り出した郭である。江戸時代の資料にみられる出山の構造物については、出山上に砲壇2か所が描かれている絵図がある（米子御城平面図・米子市立山陰歴史館所蔵）。これは海岸防備の必要の高まる江戸時代末期の絵図と考えられる。鳥取藩が米子城内に台場を設けたという記事はなく、荒尾家によって独自に築かれた砲壇と考えられている。



米子御城平面図（出山部分を拡大）

(7) 飯山（采女丸）

飯山山頂に築かれた独立した郭である。高石垣で3段に築かれた郭で、3段目は帯郭状になっている。上下段とも、北東隅は角がとられているが、これは鬼門除けの可能性も考えられる。ただし後世の改変が大きく、詳細は今後の調査に委ねるものである。

飯山に砦が築かれたのは、500年以上前の応仁の乱の頃と伝えられている。戦国時代の攻防の後16世紀後半になると、毛利氏が次第に攻め入り、永禄9年(1566)に尼子氏が降伏すると、毛利方の武将福頼氏（淀江地方の国人）等が城を守ったようである。

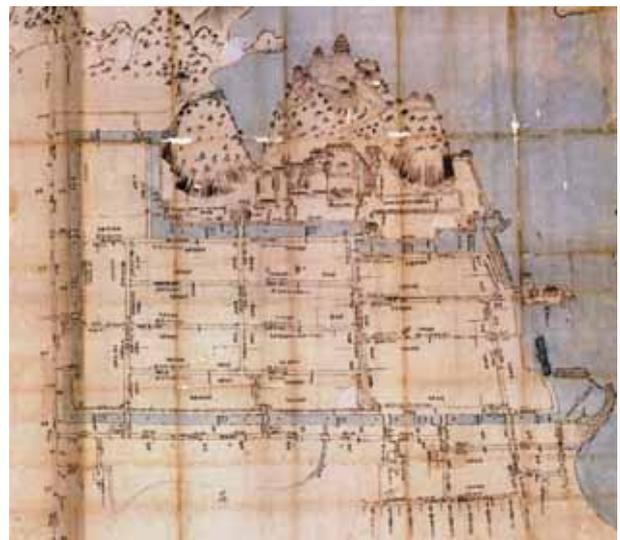
吉川広家が湊山中心の城づくりにかかると飯山は「東之丸」とされたようで、その後米子城主となった中村氏は、家臣の野一色采女のいしきうねめに飯山を守らせたので「采女丸」とも言われた。飯山は、慶長8年(1603)の「米子城騒動」の際に、横田内膳村詮の一族家来が立てこもって反抗し、出雲から堀尾氏の援軍を得て反抗軍を破ったと伝えられている。現存する絵図には建物の描写はなく、米子城騒動以後、建物は構築されていないことが推測される。また、郭周囲に巡らされた石垣は野面積みで、天正19年(1591)に吉川広家が築城を開始した段階のものと推測される。

(8) 外郭

米子城の惣構は、前述の(1)～(7)の区域を中海から水を引き込んだ内堀と中海で取り囲み、その外側には武家屋敷を配し、外堀を巡らし、外堀外側に町屋や寺町を配して、防御性と商業の利便性を兼ね備えた同心円的な構造となっている。

家臣団は城山下の内堀と外堀の間に、東西約1km、南北約380m、広さにして約38町歩ばかりの居住区に生活した。一方、外堀外側の町屋では中海に繋がる外堀の水運を利用して商業が発展する。

この惣構の構造は近世を通して変わることはなかった。



米子城下古絵図(江戸時代前期)

第3節 これまでの調査概要

1 既往の発掘調査

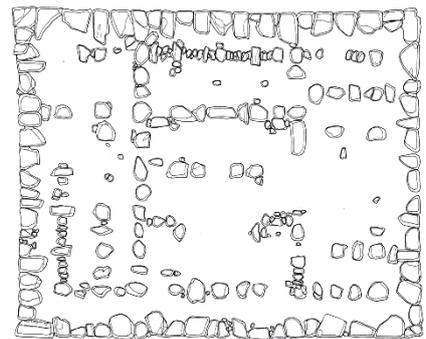
米子城跡関係の発掘調査では、これまでに試掘地点を含めて 60 か所が発掘されている。内堀内側の城郭の発掘調査については、後述する米子城跡保存整備事業に伴う内容確認調査以前には、石垣補修工事の際に一部が緊急的に実施されたのみである。これまでの調査概要については次項の表のとおりである。

発掘地点の大半は、内堀の外郭にあった武家屋敷跡であるが、外郭の東側域は調査の手が入っていない。後世の削平を免れた遺構が確認されたのは 15 か所前後であり、縄文時代から現代に至る人々の生活の痕跡が発見されている。

文献上では、米子城の築城整備は吉川氏によって始まり、『戸田幸太夫覚書（吉川家文書）』によると、周防国岩国転封の際には「十の内七つ程も出来候」とあり、17 世紀初頭には吉川が計画した米子城がほとんどできていたことになる。現在のところこれを裏付ける発掘成果はないが、鳥取大学医学部附属病院の建設に伴う三の丸内の内膳丸下（久米第 1 遺跡）の調査では、15 世紀中葉から後葉の大規模な造成盛土層が確認されており、近世城郭の構築開始時期を示唆するものと考えられる。また、中世に遡る貿易陶磁が多く出土しており、近世城郭構築以前の米子城を解明する上でも興味深い。

吉川氏の時期には、内堀に近い中海側から次第に整備されていったと考えられるが、発掘調査から見る限り、吉川氏は入府前に転封となっているためか、その痕跡は内堀に近い中海側に見られるのみで全体的に薄く、城下町が本格的に整備されたのは、中村氏、加藤氏の時期ではないかと考えられる。

城内では石垣補修や修理等に伴う調査が 3 回、確認調査が 2 回実施されており、本丸部分では番所郭、遠見郭、水手郭、天守郭が調査され、発掘された遺構は、堀・溝・石垣・礎石建物跡・掘立柱建物跡・井戸・柵列・土坑等である。いずれも地下に痕跡を刻んだもので構造物の基礎痕跡でしかないが、絵図にない堀や溝等の新しい知見を具体的に物語っている。調査によると、本丸部では十間と八間の天守礎石がそのまま残っており、文献記録に残る建物規模と一致している。遠見郭では、遠見櫓と二重櫓の礎石や縁石の一部の残存が確認されている。また、水手郭の南側の二重櫓の縁石の一部も確認されている。



米子城跡天守台平面図

また、第 1 次調査地では、時期は定かでないが土塀の基礎と考えられる低い石組みの屋敷境界や堀割が発掘されている。堀割は、幅 9.5m、深さ 1.8m の石積みで、北へ伸びていた。西側に二段の石段があり、船着場として利用されていたと考えられる。このような堀割水路は絵図には記載のないものである。

これらを基準に整備と変遷をみると、内膳丸下の久米第 1 遺跡では、15 世紀後半から 16 世紀後半にかけて段階的に埋立造成等の基礎的な整備が進んでいることから、少なくとも吉川氏の近世城郭築城以前の段階で、既に相応の城砦施設は配置されていたとみられる。

16 世紀末～17 世紀初頭の吉川氏の時期には、米子城跡第 1 次調査地では、第五層から井戸、第 4 次調査地では溝、第 33 次調査地では掘立柱建物、礎石建物等が検出されていることから、近世城郭築城当初の段階では、城郭と内堀に近い中海側は整備されていたことが推測できる。

第3章 米子城の概要

17世紀前半の中村氏、加藤氏、池田氏の時期には、第4次調査、第25次調査において屋敷境界溝が、第27次調査で溝・土坑・井戸が、第33次調査で礎石建物跡等が検出されており、城下町の整備はかなり進み、惣構は完成したものと考えられる。なお、第7次調査では屋敷施設の廃棄跡が確認されている。これは藩主の国替えに伴う石高の減少による屋敷地の衰退の可能性が示唆されている。

17世紀後半～18世紀の荒尾氏の時期は、遺物出土量が少なく、全体的に屋敷地の荒廃が進む。絵図資料にも「廃宅」や「陸地」の記載がみられる（『伯耆国米子平図』（宝永6年(1709)4月9日）。第4次調査でも粗砂が堆積する空地の様相が検出された。しかし、18世紀後半になると、第1次調査で掘割、第7次調査、27次調査で溝・土坑等が検出され、遺物出土量も増加するため、武家屋敷地において再開発が行われたものと考えられる。

既往の発掘調査 (No.は発掘調査位置図No.に対応、網掛けは本調査。)

No.	名称	所在地	原因	調査期間	調査面積	遺構等	地区
1	久米第1遺跡	久米町 89番地	鳥取大学医学部附属病院新営工事	1988年 5月～8月	1,600㎡	井戸（素掘り、石組、桶枠、井桁組）、溝、土坑、建物跡（掘立、礎石）、石垣、石列、礎敷遺構、土塁、柵列	城内
2	米子城跡1 （第1次）	西町36 番地-1	鳥取大学医学部附属病院再開発事業 （診察棟建設）	1992年 10月～11月 1992年12月 ～1993年2月	2,500㎡	内堀跡、屋敷境界（溝、石積）、堀割状遺構、建物跡（掘立）、土坑、暗渠排水、排水施設、井戸、貝溜り	城内、 内堀、 城下町
3	（試掘調査）	西町地 内	鳥取大学医学部附属病院改築工事	1992年度	51㎡	溝、焼土跡、整地面	城内
4	米子城跡2 （第2次）	西町 78・79 番地	ガソリンスタンド 新設工事	1993年8月	100㎡	土坑、土器溜り、屋敷境界、溝、柱穴、井戸状遺構	城下町
5	米子城跡3 （第3次）	加茂町2 丁目51 番地	中国電力米子営業 所新築工事	1993年11月 ～1994年2月	600㎡	16世紀末17世紀初頭～幕末の溝、建物跡、井戸、土坑。唐津、伊万里、備前焼、灯明皿、鉛玉、漆継ぎ	城下町
6	（試掘調査）	西町地 内	県道米子駅境線道 路改良工事	1993年度	98㎡	石列、瓦溜り	城下町
7	米子城跡4 （第4次）	加茂町1 丁目16 番地	マンション建設	1994年 10月～11月	240㎡	16世紀末から17世紀前半期の溝、土坑、石列（溝の上に重複）、瓦溜り、沼沢状地形	城下町
8	米子城跡5 （第5次）	西町36 番地-1	鳥取大学医学部附属病院配水モニター、防火水槽、共同溝工事	1994年 11月～12月	253㎡	北東へ下降傾斜する崖錘性堆積	城内
9	米子城跡6 （第6次）	西町36 番地-4	県道米子駅境線道 路改良工事	1994年4月 ～1995年6月	6,006㎡	溝、井戸（桶枠）、土坑、貝溜り（井戸や土坑状遺構に貝を廃棄）、木簡出土	城下町
10	米子城跡7 （第7次）	加茂町 地内	米子駅境線加茂町 沿道土地区画整理 事業区画道路新設	1994年 8月～12月 1995年6月	1,245㎡	貝塚、溝、土坑、柵、井戸（石組、桶枠）、庭園状遺構（玉石、飛び石）、敷地境界溝。内堀傍の土坑から進物木簡出土	城下町
11	（試掘調査）	西町地 内	市道新設工事	1994年度	72㎡	石列、瓦溜り	城下町
12	（試掘調査）	加茂町 地内	マンション建設工 事	1994年度	32㎡	遺構なし、陶磁器出土	城下町
13	米子城跡8 （第8次）	加茂町2 丁目16 番地-1	米子駅境線加茂町 沿道土地区画整理 事業米子商工会議 所建替工事	1995年 1月～4月	560㎡	溝・水路、石列、堰、土坑。進物木簡、土砂船免札、木札、三味線棹、独楽、羽子板	城下町

No.	名称	所在地	原因	調査期間	調査面積	遺構等	地区
14	米子城跡9 (第9次)	加茂町2 丁目54 番地	中国電力米子中央 変電所新設工事	1995年 6月～10月	915㎡	17世紀前半～幕末の屋敷境界溝、土坑、 柵列、井戸(石組)	城下町
15	第10次調査 (試掘調査)	加茂町2 丁目26 番地-4	ビル新築工事	1995年度	11㎡	遺構・遺物なし	城下町
16	第10次調査 (試掘調査)	久米町 40番地 -7	保育園新築工事	1995年度	49㎡	溝、陶磁器出土	城下町
17	第11次調査 (試掘調査)	西町62 番地	鳥取地方裁判所米 子支部改築工事	1995年度	48㎡	井戸、陶磁器、瓦出土 現地表下0.8～1.0mに近世遺構が残存	城下町
18	第12次調査 (試掘調査)	久米町 55番地 -2	ビル建築工事	1996年度	12㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
19	第13次調査 (試掘調査)	加茂町2 丁目26 番地	住宅及び医院建築 工事	1996年度	14㎡	弥生土器出土 近世の遺構・遺物なし	城下町
20	第14次調査 (試掘調査)	加茂町2 丁目24 番地	教会及び住宅建築 工事	1996年度	44㎡	須恵器出土 近世の遺構・遺物なし	城下町
21	第15次調査 (試掘調査)	内町124 番地- 16	県道米子駅境線道 路改良工事	1996年度	24㎡	粗砂、細砂検出(海岸の様相)	城下町
22	第16次調査 (試掘調査)	西町20 番地	県道米子駅境線道 路改良工事	1996年度	64㎡	土坑。弥生、古墳、平安、近世の遺跡が 散在すると考えられる。	城下町
23	第17次調査 (試掘調査)	加茂町2 丁目16 番地	県道米子駅境線道 路改良工事	1996年度	144㎡	現地表下0.7～1.0mに遺跡が存在する可 能性が高い	城下町
24	第18次調査 (試掘調査)	加茂町2 丁目26 番地-5	ビル建築工事	1996年度	4㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
25	第19次調査 (試掘調査)	東町	都市計画道路末広 町東町線工事	1996年度	40㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
26	第20次調査 (試掘調査)	東町71 番地	マンション建築工 事	1996年度	9㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
27	米子城跡21 遺跡	西町、 加茂町	県道米子駅境線道 路改良工事	1997年 4月～11月	8,059㎡	建物跡、井戸、土坑、溝、貝溜り、土器 溜り、木簡出土	城下町
28	米子城跡22 (第22次)	加茂町2 丁目	国道9号米子地区 電線共同溝建設工 事	1997年 11月～12月	130㎡	屋敷と道路との境界溝、土坑、石列	城下町
29	第23次調査 (試掘調査)	中町	住宅建築工事	1997年度	18㎡	現地表下1.1～1.4mに包含層、溝、ピッ トがあり、古代～中世を中心とする遺跡 の存在が考えられる	城下町
30	第24次調査 (試掘調査)	東町	都市計画道路改良 工事	1998年度	24㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
31	第25次調査	西町62 番地	鳥取地方・家庭裁 判所米子支部庁舎 新営工事	1998年 8月～12月	1,288㎡	井戸(素掘り10、木組1、石組2、曲物 1、桶1)、屋敷境界溝、建物跡、柵列、埋 設桶、木簡出土	城下町
32	第26次調査 (試掘調査)	内町	県道米子駅境線道 路改良工事	1998年度	60㎡	江戸時代後期～末の杭列、護岸、旧海岸 線を検出	城下町

第3章 米子城の概要

No.	名称	所在地	原因	調査期間	調査面積	遺構等	地区
33	第27次調査	加茂町2丁目54番地	中国電力湊山変電所新設工事	1999年4月～6月	230 m ²	水田跡、井戸（うち1基は今井家の井戸）、屋敷境界溝、溝、土坑、埋設桶、木簡	城下町
34	第28次調査 (試掘調査)	内町	県道米子駅境線道路改良工事	1999年度	22 m ²	杭列、護岸 江戸時代後期～末に大規模な土地造成を行い、湊の整備を行った可能性あり	城下町
35	第29次調査	内町	主要地方道米子境港線（旧県道米子駅境線）道路改良工事	1999年6月～9月	500 m ²	堤防状遺構、舟入遺構（為替蔵の設置に伴う）	城下町
36	第30次調査 (試掘調査)	内町	検察庁官舎改築工事	1999年度	20 m ²	明治期以降の埋立層あり、明治以前には海岸であった	城下町
37	第31次調査 (試掘調査)	久米町	マンション建築工事	1999年度	36 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城内
38	第32次調査 (試掘調査)	加茂町	マンション建築工事	2000年度	8 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城下町
39	(試掘調査)	久米町	鳥取県西部地震災害復旧工事	2000年度	11 m ²	石垣の基礎部分の調査で、大型の石が根石として使用されていた。瓦が多量に出土	城内
40	第33・36次調査	西町所在	マンション建築工事	2001年6月～9月	950 m ²	17世紀初頭以降の掘立柱建物、礎石建物、井戸、石組、水路跡、埋甕、畦状遺構、溝、土坑、畑状遺構、石垣。江戸前期は礎石建物1、掘立柱建物1～4、後期は礎石2、石組遺構。家紋瓦	城下町
41	第33次調査 (試掘調査)	西町	マンション建築工事	2001年度	10 m ²	溝、建物跡	城下町
42	第34次調査 (試掘調査)	東町	アパート建築工事	2001年度	16 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城下町
43	第35次調査 (試掘調査)	久米町	ホテル建築工事	2001年度	52 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城内
44	第37次調査 (試掘調査)	加茂町	マンション建築工事	2001年度	28 m ²	既存の建物によりやや改変を受けているが、近世の遺跡が残存すると推定される	城下町
45	第38次調査	加茂町1丁目	マンション建築工事	2002年4月	274 m ²	建物跡、柵列、溝、井戸、土坑	城下町
46	第39次調査 (試掘調査)	中町80番地-1	マンション建築工事	2002年度	12 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城下町
47	第40次調査 (試掘調査)	久米町	ショッピングセンター建築工事	2002年度	12 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城内
48	第41次調査 (試掘調査)	久米町32番地	マンション建築工事	2003年度	71 m ²	建物跡、屋敷境界溝、溝、土坑	城下町
49	第42次調査 (試掘調査)	西町	立体駐車場建築工事	2006年度	8 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城下町
50	第43次調査 (試掘調査)	東町	マンション建築工事	2006年度	6 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城下町
51	第44次調査 (試掘調査)	西町86番地	鳥取大学医学部附属病院改築工事	2007年度	12 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城内
52	第45次調査 (試掘調査)	久米町133番地-1	建物建築工事	2008年度	9 m ²	既存建物により遺跡は消滅	城内

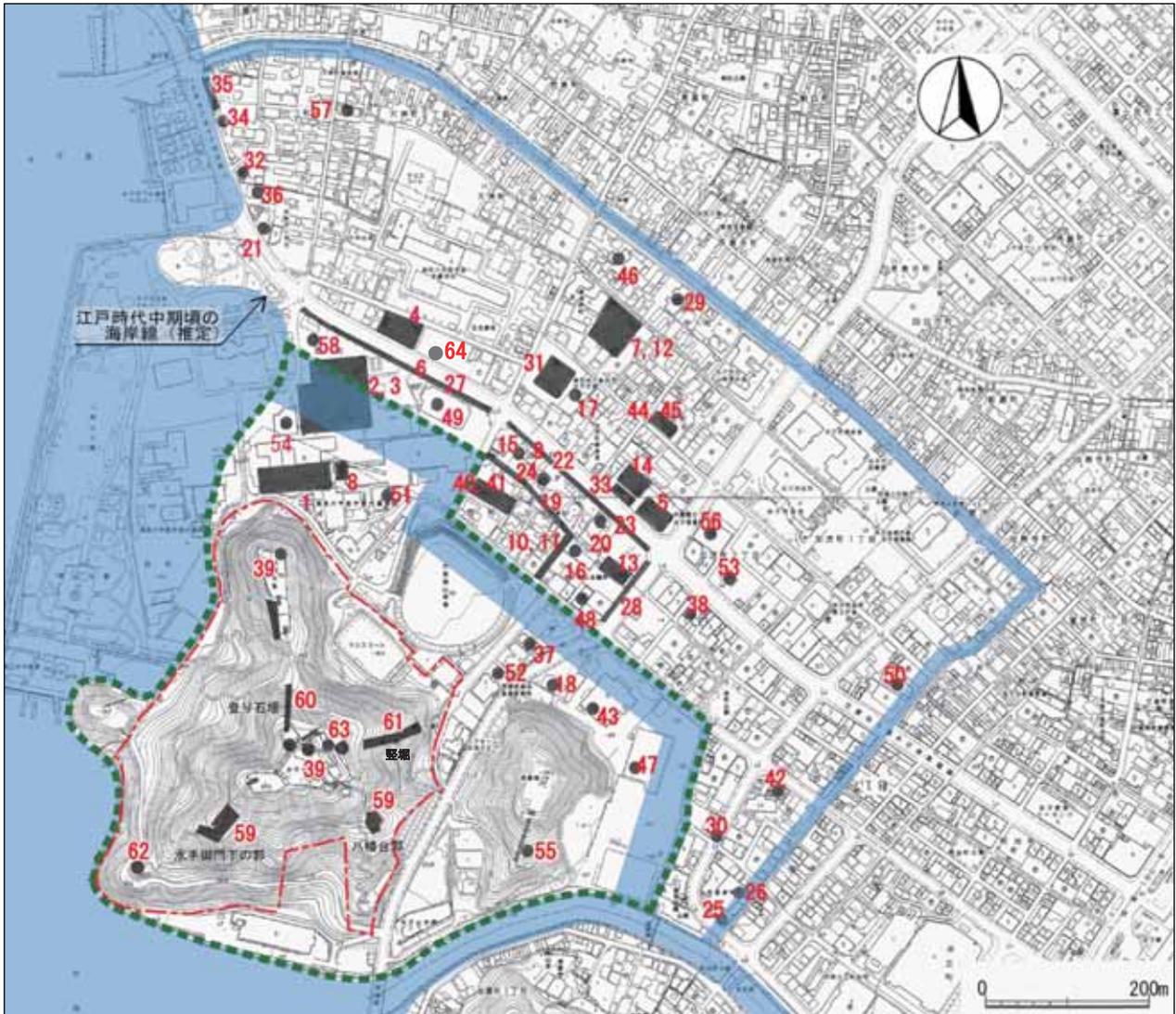
No.	名称	所在地	原因	調査期間	調査面積	遺構等	地区
53	第46次調査 (試掘調査)	加茂町2丁目130番地	コンビニエンスストア建築工事	2008年度	27㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
54	第47次調査 (試掘調査)	西町	病院増築工事	2009年度	16㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
55	第48次調査 (試掘調査)	久米町226番地-1	テレビ送信設備整備工事	2010年度	7㎡	盛土中から近世瓦片が出土	城内
56	第49次調査 (試掘調査)	加茂町2丁目100番地-1	店舗建設工事	2011年度	42㎡	陶磁器が出土したものの、後世の開発によって遺跡は消滅か?	城下町
57	第50次調査 (試掘調査)	内町57番地	アパート建設工事	2011年度	6㎡	陶磁器が出土したものの、後世の開発によって遺跡は消滅か?	城下町
58	第51次調査 (試掘調査)	西町36番地-1	自家発電設備設置工事	2012年度	18㎡	古墳時代後期～古代と考えられる溝、ピットを検出	城下町
59	遺構確認調査	久米町	米子城跡保存整備事業に伴う遺構確認調査	2015年度	1400㎡	城内2か所で新たな郭を確認	城内
60	遺構確認調査	久米町	米子城跡保存整備事業に伴う遺構確認調査	2016年度	76㎡	登り石垣の確認	城内
61	遺構確認調査	久米町	米子城跡保存整備事業に伴う遺構確認調査	2017年度	146㎡	竪堀の確認	城内
62	雪害対策事業 (試掘調査)	久米町	米子城跡雪害対策事業に伴う遺構確認調査	2017年度	30㎡	南西部の郭及び南西麓の石丁場の確認	城内
63	遺構確認調査	久米町	米子城跡保存整備事業に伴う遺構確認調査	2018年度	156㎡	竪堀、本丸下切岸、登城路の確認	城内
64	第52次調査 (試掘調査) 本調査	西町	医学部附属病院立体駐車場建築工事	2018年度 (本調査は継続中)	9㎡ 600㎡	江戸時代及び弥生時代～古墳時代の土器、遺構を確認	城下町



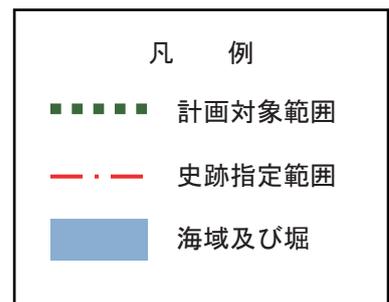
水手御門下郭の石垣確認調査 (2015年度)



登り石垣の遺構確認調査 (2016年度)

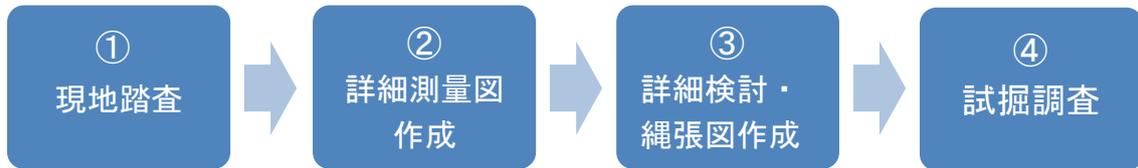


史跡米子城跡周辺の発掘調査位置図



2 保存整備事業に伴う内容確認調査

米子市教育委員会では、史跡米子城跡保存整備事業の一環として、平成 27（2015）年度から、史跡内の内容確認調査を進めている。平成 27 年度は、発掘調査に先立ち、史跡内の詳細測量及び分布調査を行った。踏査の結果、山腹の樹木内に石垣や郭、切岸、土塁等の遺構が確認できたことから、米子城内の山腹にはまだ、様々な遺構が包蔵されていることが推察された（『史跡米子城跡保存活用計画書』第 3 章参照）。



米子城跡整備事業に伴う遺構調査計画

- ①現地踏査を行い、遺構の確認を行う。
- ②確認踏査の成果を元にしながら、詳細測量図を作成する（業者委託）。
- ③詳細測量図をもとに古絵図、文献資料等との照合、歴史的変遷等の総合的検討を行い、詳細縄張図を作成する。
- ④多時期にわたる遺構が包蔵されている可能性も視野に入れた調査を行うために、何か所かで試掘トレンチを設定し、内容確認調査を行いその性格を把握する。

その成果に基づき、平成 27 年度から内容確認のためのトレンチ調査及び石垣確認調査を行っている。現在までの成果は以下の通りである。

○平成 27 年度：深浦側の二か所での郭の確認（本丸南東及び南西側）

- ・八幡台郭：天守南東側において野面積の石垣の郭を確認
上面は幕末嘉永年間の四重櫓補修時の作業場（『鹿島家文書』記載）として使用（記年銘瓦の出土）。
- ・水手御門下郭：天守南西側において石垣が巡る二段の郭を確認。
月山富田城側（南西）を向く。石垣上部は破城の跡とも考えられる。



八幡台郭全景



水手御門下郭で検出された石垣

○平成 28 年度：登り石垣、御門の確認

・登り石垣の確認（本丸北西側）

既存の米子城絵図に描かれ、研究者により指摘されていた登り石垣が、内膳丸の御門から遠見櫓北東隅部にかけて確認された。

発掘調査では、一部試掘トレンチを設け、登り石垣の構造の解明を行った。地山面である基盤岩まで掘り下げて調査を行った結果、主郭のある湊山と内膳丸のある丸山を結ぶ尾根の稜線を利用し、西側（中海側）の岩盤をL字状に削平し、中海側



登り石垣

にのみ石を積んでいることが判明した。その構造を見ると、湊山の尾根稜線の地形をうまく利用し、高低差をつけて防御性を高めると同時に、非常に効率的に登り石垣を築造していることがよくわかる。

面上からは大量の瓦が出土していることから、石垣上には瓦葺きの土塀が構築されていた可能性が考えられる。

・御門の確認

現況で、登り石垣と内膳丸側との間に幅 6.0m ほどの平坦面がある。絵図ではここに御門が描かれている。調査の結果、御門左右に築かれた石垣と礎石を検出することができた。この石垣の形状からは、登り石垣の築石よりは新しい時期に構築された石垣と考えられる。検出された礎石は、位置的に見て御門の脇小門の礎石と考えられる。さらに、古い礎石の一つが、御門に伴う石垣の下から検出された。この礎石の検出により、御門が築かれる以前に、登り石垣の背面にあたる平坦面上に櫓等の建物が存在していたことが判明した。

以上のことから、御門は、登り石垣を一部改変して取り付けられた門であることがわかった。すなわち、築城当初の段階ではここに門はなく、登り石垣は内膳丸先端まで延びる長大な石垣で海側を遮断し、石垣背面の鞍部を削平した平坦面には監視のための櫓等の建物が構築されていたことが推測できる。御門はその後、内膳丸を現況のような郭に改変した段階で、鈴門側に降りる利便性のために取り付けられたものと推測される。

○平成 29 年度：豎堀、石丁場の確認

・豎堀の確認（本丸北東側）

二の丸枡形から本丸番所郭方向に延びる豎堀（北東側）を確認した。枡形虎口が付設する二の丸高石垣の東端は虎口で屈曲し、南北方向に築かれて、南端は切岸に繋がる。この切岸は城内路に並行して南方に（深浦側）に直線的に 43m 伸びたところで 130 度、鈍角気味に屈曲している。今回、確認された豎堀は、この屈曲部分から構築され、等高線に直交して直線的に本丸番所郭付近まで構築されている。堀の全長は 63m、深さは北壁側が約 6 m、南壁側で 2 m を測り、北側は急崖を呈している。本丸番所郭付近では、堀の北壁は切岸状となり 90 度屈曲して、本丸を巡る石垣下の急崖に繋がる。この北端部分では堀底は広がり、切岸に囲まれた空間となっている。

調査では、豎堀を横断する試掘トレンチを 3 か所設け、その構造の解明を行った。その結果、

北側の堀壁は地山をL字状に削り出していることが判明した。これに対し、南壁はほぼ盛土による土塁で構築されていることが分かった。盛土の大半は基盤岩ブロックであることから、北側の切岸を構築する際に生じた土を、南側に盛って土塁を構築したものと考えられる。土層断面の観察によると盛土は、後世に斜面崩壊を起こした状況を呈していることから、本来的には、ある程度の高さがあったものと考えられる。以上のことから、この堅堀は北側の切岸と南側の土塁で構築されていることが判明した。

出土遺物の大半は、本丸からの転落遺物である。このうち、特筆すべきは、本丸側の堅堀端部から出土した軒平瓦である。この瓦の文様は小槌の左右に宝珠を配した中心飾りの左右に唐草文が配される。これは月山富田城、備前岡山城と同タイプの文様であり、過去に飯山（采女丸）では採集されていたが、本丸のある湊山においては今回が初めての出土である。

・石丁場の確認（本丸南西側）

平成 29 年度は雪害対策事業として、本丸南西部の水手御門下郭下方の山腹の確認調査を行ったところ、石丁場が確認された。石質から、石垣用の石材を切出したものと考えられる。

〇まとめ

平成 27 年度から進めている確認調査の結果、築城初期の米子城の姿が臆気ながら見えてきた。

米子城の縄張りは山頂部の本丸を中心にして、北側の丸山に内膳丸、東側の飯山には采女丸を配していたことは周知されていたが、本丸南西の水手御門下郭、南東の八幡台郭が新たに確認されたことにより、築城初期の段階で、中海側の防御を重視していたことが推測できる。また、北西側に遠見櫓から内膳丸にかけて登り石垣を設け、北東側に本丸番所郭から北東麓の二の丸枡形にかけて堅堀を設け、本丸から麓にかけて延びる2つの防衛ラインにより、御殿の所在する湊山北麓の二の丸を防御している。さらに、登り石垣は内膳丸から水手御門下郭まで一体化した防御ライン、堅堀は麓の二の丸高石垣と一体化した防御ラインを築いており、湊山の地形を巧みに利用して効率的に防御性の高い縄張りを構築していることが推察できる。

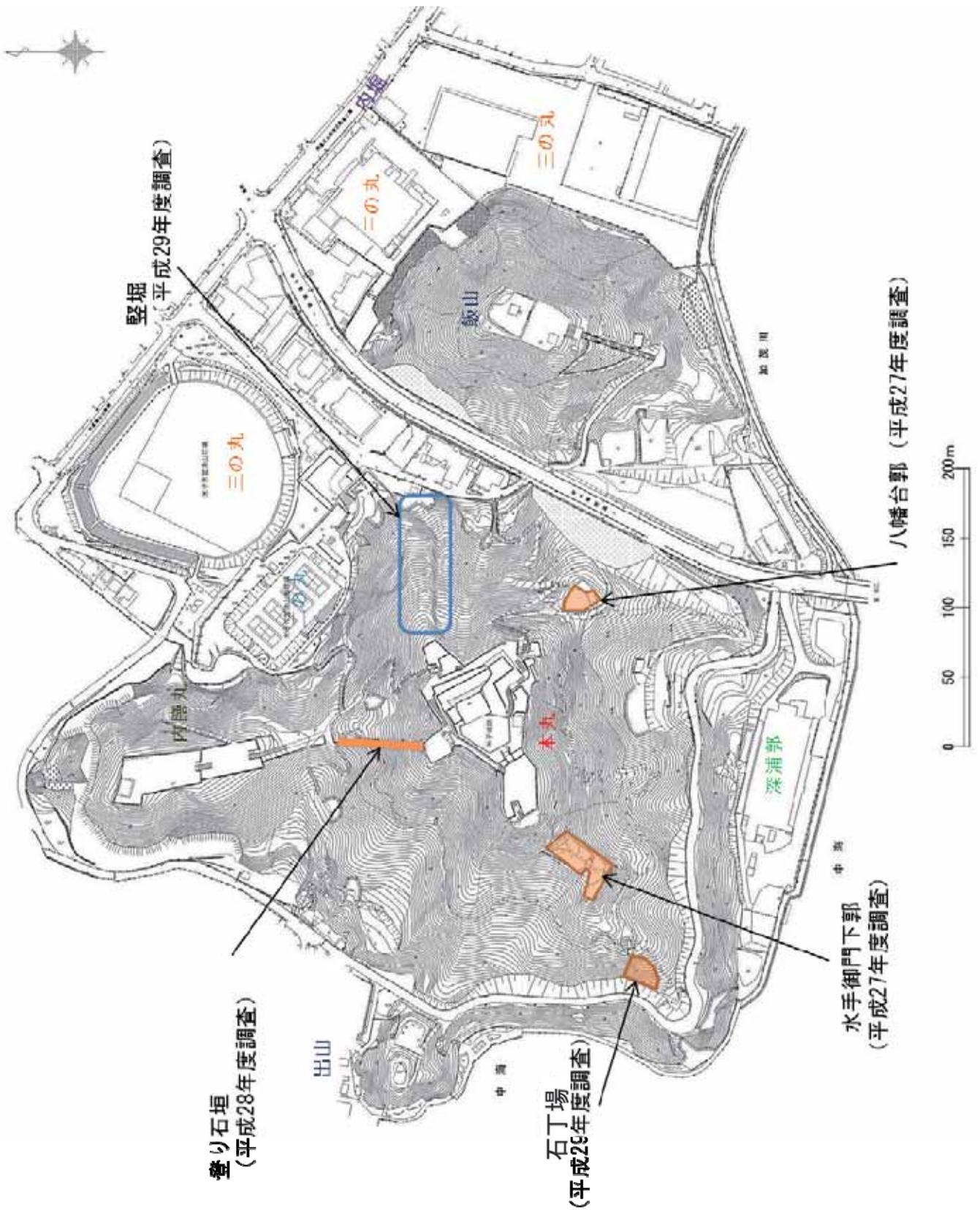
また、堅堀から出土した小槌宝珠文の軒平瓦は、備前岡山城や月山富田城で出土しているタイプであり、吉川広家期のものと考えられている（乗岡 2015、加藤 2017）。このことから、吉川広家の段階で、湊山山頂に瓦葺建物が存在していたことが推測できる。これは築城初期の米子城に姿を考える上で非常に重要な資料であるとともに、山陰、山陽の城をつなぐ遺物としても重要な意味を持つものである。



石丁場調査風景



石丁場



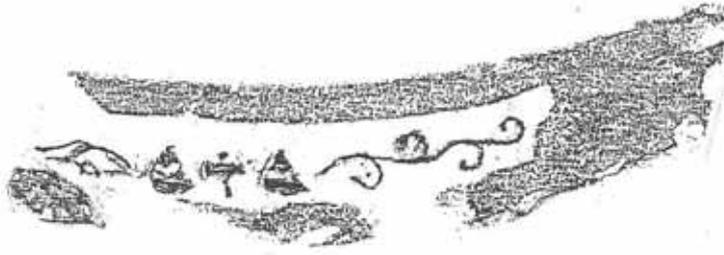
史跡米子城跡保存整備事業に伴う内容確認調査位置図



『米子御城明細図』（元文4（1739）年部分・鳥取県立博物館蔵）



登り石垣位置図・俯瞰写真



豎堀出土小槌宝珠文軒平瓦



北東側上空から見る米子城跡本丸



番所郭から見る米子城跡本丸



八幡台郭で検出された石垣



水手御門下郭



登り石垣



豎堀

3 石垣調査

米子城の石垣を備えた近世城郭としての本格的な普請は、戦国時代末期の天正 19 年(1591)頃に西伯耆の領主となった吉川広家により始まり、関ヶ原の戦い後、代わって領主となった中村一忠により慶長 7 年(1602)頃に完成したといわれている。

米子城跡は、湊山の地形を巧みに利用した石垣による縄張りが良好に遺存しており、山頂部の本丸と内膳丸は全て石垣で構築され、石垣により虎口や枡形を構成している。特に本丸東側は天守台石垣の控え石垣が 2 段あり、四重櫓台石垣と一体となって米子城跡の特徴的な景観を形づくっている。

一方、山裾の二の丸には高さ 10m 程度の石垣がある。この石垣の前面は湊山球場の外野スタンド造成による盛土がされているため、本来の石垣高は 15m 程度と推定される。また二の丸入口には、石垣により枡形虎口が構成されている。

石垣修理の記録については、17 世紀後半から 19 世紀代にかけての石垣修理願絵図が多数残存している。近年は昭和 57～59 年度(1982～1984)に石垣の崩落に対応するための積み直しを行い、平成 12 年(2000)に発生した鳥取県西部地震で被災した石垣の復旧工事を平成 13 年度に実施した。

さらに近年の発掘調査で、四重櫓修復工事時の石材加工場と考えられる八幡台において築城初期と推定される石垣や、内膳丸から本丸の遠見櫓にかけての「登り石垣」を検出する等、米子城跡の石垣調査、研究が進んでいる。

米子城跡の石垣は、米子城の変遷を示す貴重な遺構であり、多様な石垣を通して「歴史の証拠」を体感することができる。主な石材は、安山岩、石英安山岩、凝灰角礫岩で、石積み技法は、野面石による「野面積み」、割石や切石による「打込ハギ」「切込みハギ」が見られる。その他、「布崩し積み」、「谷落し積み」が見られ、「隅角部の算木積み」、地形を活かした「シノギ角」も見られる。また天守鉄御門跡付近には矢穴の残る岩盤露頭があり、湊山の山腹には石材採掘跡と推定される窪地や石垣修理時の石材加工場も残存している。また枡形には矢穴の穿孔過程を示す石垣もある。

現在、石垣の保全と眺望の観点から、伐採を含めた樹木管理を実施しているが、石垣前面や天端、石垣面に生育している樹木もあり、石垣保全のため、さらに樹木管理を進める必要がある。また石材の欠落、孕み出し箇所もあるため、貴重な遺構である石垣の日常的な観測、維持管理、危険箇所の把握の観点から、石垣基礎調査(石垣カルテ等の作成)が必要となっている。



本丸東側の石垣



天守台石垣と控え石垣



天守台石垣
打込みハギ、布崩し積み 隅角部:算木積み



四重櫓台石垣（幕末に積み直し）
切込みハギ、谷落し積み 隅角部:算木積み



本丸への櫓形虎口（鉄御門跡）



表御門二重櫓跡石垣
打込みハギ、布崩し積み 隅角部:算木積み



水手御門櫓跡石垣
打込みハギ、布崩し積み



内膳丸石垣
打込みハギ、布崩し積み 石垣面に樹木



二の丸石垣
打込みハギ、布崩し積み



二の丸石垣
隅角部:算木積み



二の丸石垣 シノギ角



二の丸石垣
打込みハギ、布崩し積み 隅角部:算木積み
石垣天端際に樹木



二の丸石垣 (桁形)
打込みハギ、布崩し積み 隅角部:算木積み



二の丸石垣
打込みハギ、布崩し積み 隅角部:算木積み



四重櫓台に残る「忘れ石」



矢穴痕が残る岩盤露頭



石材の欠落、孕み出し



石垣前面に樹木